

(三) 姫路の古墳こふん

四世紀から七世紀にかけて、有力者たちは盛り土をしたりつばな墓を造りました。これが古墳です。古墳はその形によって、円まるいものを円墳えんぶん、四角のものを方墳ほうふん、前が四角で後ろが円いものを前方後円墳ぜんほうこうえんぶんなどに分類しています。前方後方の古墳も少しありました。

たて穴式古墳 四―五世紀に造られた古墳を前期古墳と呼んでいます。

四世紀の古墳は、小山や尾根おねを利用して造られ、たて穴式の石室を持ってい

ます。

灘なだのけんか祭りめがりで知られている妻鹿おたびやまの御旅山おくの奥には、古墳が散在しています。ここの六号墳は、全長四十八メートルの前方後円墳で、この地方の長の墓と思われます。その南西の屋根にある三号墳は、割竹型わりたけの木棺もっかんを二列の石の間にじかに埋めた円墳で、ここからは銅鏡・鉄剣・銅や鉄の矢じり・ガラス玉などが出土しました。これは、姫路市内では最も古い古墳であるといわれています。

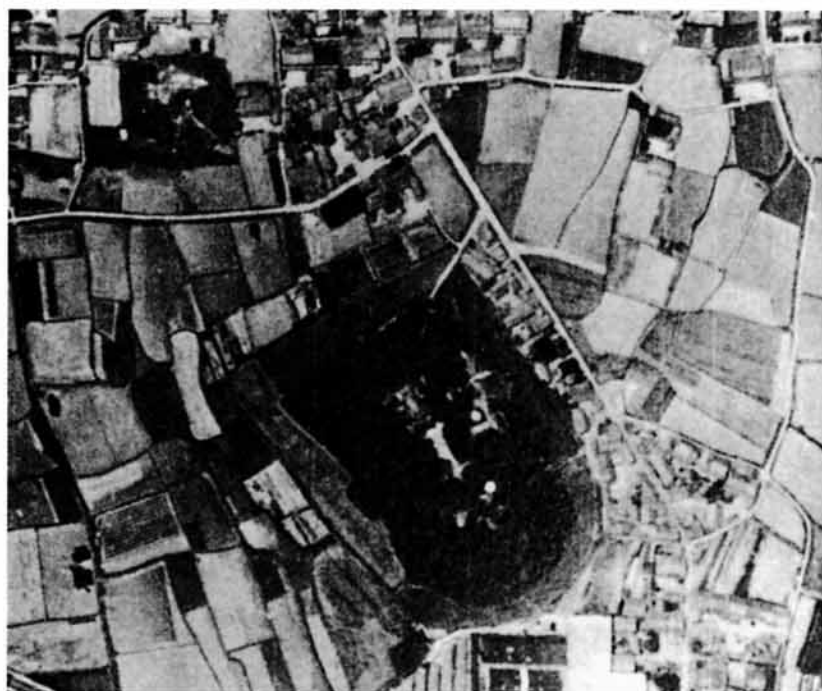
生野橋いくのを東へわたり豊富町とよとみに入った市川ぞ沿いの小山の上にあった横山古墳は、全長三十メートル余りの前方後円墳を中心に、大小約三十の墓が集まった共同墓地でした。盛り土があったのは前方後円墳と直径二十メートル前後の円墳七基きの計八基で、他は盛り土がなく、岩盤がんばんを掘り下げて棺を入れ、その土で埋めかえしたためらしい形式のものでした。昭和四十六年に調査されたのですが、

このような例は全国になく、まことに貴重な遺跡でした。今は、五世紀に造られた二つの円墳だけが茂みの中に保存されています。

御旅山の北で仁寿山の西、小高い丘の北端に、全長六十メートルの兼田古墳があります。これは前方後円墳で、人間の頭ぐらゐの大きさの河原石を葺石として表面にしきつめていたらしく、また円筒埴輪もあつたようです。

壇場山古墳 五世紀に入ると、平野部にたいへん規模の大きな古墳が造

られるようになりました。その代表が、山陽本線御着駅の北で国道をこえたところにある壇場山古墳です。これは、低い丘の上に築かれ、全長百四十メートル、後円部の直径八十二メートル、高さ十メートルで、幅十三―二十二メートルの堀が古墳を取り巻き、大きさでは県下第三位、姫路平野では最大の前方後円墳です。後円部の頂上には、石室がなく、直接土の中へ埋められた長持型の石棺が露出しています。そのふたは長さ三メートル、幅一・四メートルで、前



壇場山古墳と山の越古墳

後左右に合計八個の縄をかける突起とつきがついています。

壇場山古墳は、もとは表面に葺石がしかれ、円筒埴輪を二重にめぐらし、後円部の頂上は家・盾たて・短甲たんこう（古代のよろい）などの形象埴輪でかざられていたようです。これは、王者の墓と呼ぶにふさわしいもので、姫路地方の大部分を支配していた豪族ぞくの墓にちがいありません。

壇場山古墳のすぐ北に、山の越古墳こしがあります。これは、東西五十・六メー

トル、南北四十八・八メートルで播磨地方ではめずらしい方墳です。方墳では県下第一位の大きさのものです。一八九七年（明治三〇年）に、露出していた石棺を開いて調査したところ、底に小石をしきつめて遺体を安置し、銅鏡一・勾玉三・管玉数個・刀剣数本などの副葬品が見つかっています。また、古墳の丘には円筒埴輪を三重にめぐらしていたともいわれています。

金の耳かざり

四郷町坂元（しやごう さかもと）に、

小山を利用して造られた円墳の宮山古墳が

あります。直径は約三十メートルで、円筒埴輪をめぐらしていました。

この古墳には、上に二つの石室がならんでおり、その下にまたもう一つの石室がありました。上の一つが荒れていたので、一九六九年（昭和



金の耳かざり
（宮山古墳出土）

四四年)に調査していると、南にもう一つ発見されました。その後、この古墳はブルドーザーでけずられることになり、その工事中に下の第三の石室が発見されたのです。

第三石室は、完全な姿で残っていました。たて穴式の石室に木棺が納められ、棺の中には銅鏡・たれかざりつきの金の耳かざり一對・銀の指輪・剣・ガラス



宮山古墳の第三石室

や石製の小玉約三千個などが、そして棺外には短甲・冑かぶと・各種の武器・農具・馬のくつわ・土帥器はじきや須恵器すえきの壺つぼなどが副葬されていた。

第二石室からは、銅鏡・

銀をはめこんだすばらしい環頭太刀をはじめ刀剣四十本、たれかざりつきの金の耳かざり一對、鉄の矢じり数十個、ガラス製の小玉約七千個などが出土しました。

このような豪華な品々とともに葬られた者は、この地方の豪族であったにちがいありません。とくに二対の金の耳かざりは、細かな細工をした見事なものです。これは、技術の進んでいた朝鮮で作られたものだろうといわれています。当時の日本と朝鮮との関係を研究する上で、大切な資料です。宮山古墳の出土品は現在、国の重要文化財になり、一帯は古墳公園として保存されています。

勝原区の丁には、大津茂川流域で最大の瓢塚古墳があります。全長百一・八メートル、前方部の幅三十六・三メートル、後円部の直径五十四・五メートル、高さ五・一メートルで、県下では七番目に大きい前方後円墳です。

平野の自衛隊のところにあった人見塚は、わが国でも数少ない二階建ての家

の埴輪が発見されたことで有名です。

横穴式古墳と群集墳

六世紀ごろになると、玄室げんしつ（死者を葬る石室）と羨せん

道みち（玄室への通路）とを持った横穴式古墳が造られるようになりました。これを後期古墳と呼んでいます。

を後期古墳と呼んでいます。

四郷町見野みのには、側石・天てん

井じょういし石とともに五メートルもの

巨石きよせきを組んで、横穴式石室を

造った古墳があります。広峰ひろみね

小学校の北、北平野にある御み

輿塚こしづか古墳は、横穴式石室の中

に、板状の石を組み合わせて

家型にした石棺を残している



北平野の御輿塚古墳の石室

ので知られています。山田町多田の諏訪神社は、諏訪の岩穴といって前方後円墳の横穴式石室を本殿にし、その前に拝殿を建てています。市内最大の横穴式石室を持った古墳は砥堀の権現山古墳で、玄室がたて三・八メートル、羨道が十メートルもあります。

また、このころには横穴式石室を持った直径十メートル前後の円墳が、多数集まって造られるようになりました。これは、農業が発達して農民の中にも力のある豊かな者が現れ、自分や一族の墓を多く造るようになったからだといわれています。これを群集墳といえます。

瓢塚古墳の東にある丁池の周りの三方の丘や谷間に、丁群集墳がありました。百基近くの古墳が確認されて、市内最大の群集墳といわれていましたが、現在は古墳公園内に六基だけ保存されています。

丁の北側にある山の尾根には、上になるほど石をせり出して積み、ドーム型



小丸山の横穴式石室（左）と箱式石棺（右）

にしたためずらしい石室の古墳が一基残っています。

飾東町志吹しきとうちようしぶきの小丸山古墳群は、山頂に横穴式古墳四基があり、それを取りまいて箱式石棺が十一基もある群集墳です。おそらく、一族の墓なのでしょう。箱式石棺からは、完全な三体の人骨が見つかり、また副葬品には装飾そうしよく付須恵器・金環・馬具かんなどがありました。

山陽自動車道の工事にあたって、多くの遺跡が調査されました。代表的なものに、太市おおいちの西脇古墳群などがあります。